JSRECCE Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

日本保育学会会報

2023年1月4日　発行
編集・発行 一般社団法人
日本保育学会
編集責任者　上田敏丈

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

●第185号●

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-2 B,R ロジェ T-1
e-mail：hoiku.info@jsrecce.jp ※アドレスが新しくなりました※
http://jsrec.or.jp

●特 集● これからの保育者を育てるために

185号の特集は、「これからの保育者を育てるために」となりました。コロナ禍の中で、実習の中止や延期、学内での実習、制限のある実習などを多くの養成校・学生が経験することとなりました。この経験を通して浮き彫りになったのは、保育者を育てるために何を大事にするのか、ではないでしょうか。それぞれの取り組みについて報告して頂きます。

保育現場と養成校との協働による保育者養成教育をめざして

中村学園大学教育学部教授　那須　信樹

2022年現在、我が国の保育・幼児教育の質の確保・維持、そして向上に向けた議論や取組の展開が加速されてきている。本稿では、筆者も関わりのあった厚生労働省（以下、厚労省）の「保育の現場・職業の魅力向上検討会」（以下、魅力向上検討会）における議論を中心に、今後の保育者（保育所保育士・幼稚園教諭・保育教諭）養成教育のありようについて考えていく視点の提供を試みたい。

2020年6月、厚労省は「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」における「議論のとりまとめ」を公表。保育実践の質の確保・向上に向けた実効性のある取組となるよう、保育所等と養成校との協働の必要性が指摘された。魅力向上検討会も、同年9月に「報告書」を公表。その「基本的な考え方」の中にも、「養成段階の取組を充実させる」ことへの言及が認められる。

「報告書」においては、「保育の現場・職業の魅力向上のための具体的な方策」のひとつとして、「養成校における教育の充実と質の向上」（「報告書」p.11）が掲げられている。保育現場と行政、養成校が連携しつつ、「①実習」や養成校の「②授業」、「③就職」、保育者研修等「④卒業後のキャリアアップ」といった4つの局面において、これまで以上に連携・協働していくことの必要性が謳われている。養成教育の質の向上と授業改善に向けた「保育現場との協働による様々な取組」の展開への期待が示されている。まさに、持続可能な養成教育に向けた「保育現場と養成校の協働」を生み出す4つの視点（局面）を踏まえつつ、今後の養成教育のありようを見つめていく必要がある。以下、ごく一部ではあるが、今後、保育現場と養成校の協働を生み出すことにつながると思われる取組を紹介したい。

「①実習・②授業」（開かれた養成教育の実現）という視点から

2022年3月より開始された（一社）全国保育士養成協議会主催による「実習指導者認定講習」に代表されるように、実習指導における質の差を改善していくための養成校組織レベルでの取組が開始されている。また、筆者が勤務する大学においては、地元の保育現場関係者を交えながら、実習で得られた学びをポスターセッションという形で公開し、保育現場と養成校との実質的な協働を生み出す学生参画による実習指導授業の新展開に向けた一歩を踏み始めたところである。

「③就職」（学ぶ主体としての学生の自律的な進路選択の保障）という視点から

異なる養成校に学ぶ学生同士がつながり、オンラインによる自主的な保育研究会を立ち上げている。学生主体の視点から捉えた就職活動のありようを模索しつつ、現職の保育者や管理職に各回のテーマに基づいた話題提供をいただきながら、主体的な就職活動へと繋げていく取り組みも開始されている。各養成施設の就職を担当する部局の働きのありようが問い直されてきていることを実感する。

「④卒業後のキャリアアップ」（養成校教員としての倫理観の醸成）という視点から

現職者の研修等を担う養成校教員も多く、すでに多くの実績が積み重ねられてきている。しかしながら、多様な専門性を背景に持つ養成校教員の存在は、保育現場にとっても極めて関心の高い存在であるにも関わらず、その「多様な専門性」がまだまだ保育現場に対して還元されていないとの声も聞かれる。管理職を含む現職の保育者にとって、研修は保育専門職としてのキャリア形成を支える重要な機会であると同時に、養成校教員としてのキャリアを形成していく上でも重要な機会となっている。地域の保育者研修等、今後、養成校教員として、だれもが講師を務められるだけの力量を備えていく必要があるだろう。

最後に、養成教育の当事者は学生であり、養成校の教職員であり、また保育現場の関係者であり、行政であるという認識を改めて共有したい。持続可能な養成教育の観点からも、この当たり前の事実を令和の時代における養成教育としていかに具現化していくのか、当事者間の開かれた関係性の中でさらに議論を重ねていく必要がある。

● *Profile*

那須　信樹（なす　のぶき）
中村学園大学教育学部教授
幼稚園教諭、保育士、その管理職等を経て、実務家教員として、保育者の養成教育と研修等を通じた現職者の育成に携わる。現在、「保育者のキャリアアップ研修における効果検証に関する開発的研究」（基盤研究（C）：課題番号 22K02398）に取り組んでいる。

学生理解と保育者養成
－保育に重ねて思うこと－

松田　純子

保育者養成に携わって 20 年以上になる。その間の学生たちの変容については、筆者自身も折に触れ実感することがある。自然体験や遊び、対人コミュニケーションなど、様々な面で経験が乏しくなっているという印象である。その背景には、急激な社会の変化とそれに伴う成育環境の変化があるだろう。ここ数年のコロナ禍の影響も看過できない。そうした中でも、毎年、学生たちは養成課程を修了し、多くが保育者として巣立っていく。保育者養成校は今、そしてこれから、学生たちをどのように育てていけばよいのだろうか。私感になるが、述べてみたい。

原体験－保育学生の出発点－

幼児の頃の保育者との思い出として、ある学生は次のようなエピソードを書いてくれた。

私は幼稚園で泥団子をよく作っていて、帰る前には誰にも取られないように草むらに隠していました。ある日、草むらから出るとそこには先生がいて、「明日はもっときれいな泥団子を完成させようね」と言ってくれました。明日、幼稚園に行くのが楽しみになった瞬間でした。

少なくない数の学生が、このような保育者に「理解してもらった」「受けとめてもらった」という思い出をもっている。そして、そうした思い出や保育者の存在が、学生が保育者を志すきっかけとなっているようだ。この原体験を大切にしたい。

学生の「よさ」や「可能性」

文部科学省資料『幼児理解に基づいた評価』(2019 年)のなかで、「幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指している」(p.9) と説明されている。授業でこの文章に触れる度に、自分は学生たちの「よさ」や「可能性」を理解しようとしているだろうかと自問する。昨今の学生の状況を憂える前に、目の前の学生たち一人ひとりの「よさ」や「可能性」を理解しようとすることが基本ではないか。学生たちに対しても、より丁寧な対応や対話を通した理解への努力が必要ではないかと思う。

実習への主体的な取り組み

保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、子どもたちの主体性を育むことが重要なこととして位置づけられている。したがって、保育者を目指す学生にとっても、主体的な学びの経験は不可欠である。特に、保育現場での実習は、学生にとって大変重要な学びの機会である。養成課程の柱ともいえる。この実習を有意義なものにするためには、もちろん受入れ施設と養成校の連携・協働が欠かせない。その在り方については、新しい議論や取り組みが始まっている。ここで紙幅は割けないが、今後の重要課題である。

学生が主体的に「自分の実習」を行うためには、まず実習先の選択に関して、学生の積極的な関与が重要だと考える。地域的に選択肢が限られている場合もあろう。しかし、自分の実習先が決まるプロセスに学生が主体的に関わることで、準備段階から「自分の実習」という実感が得られるとともに、実習施設への心理的な距離も縮まるだろう。手間がかかることだが、一人ひとりの理解に基づいた援助により、学生が得るものは大きいのではないだろうか。

実習体験－保育者としての出発点－

養成課程の最後の保育所実習を振り返って、ある学生は次のように綴っている。

園長先生の「保育者は前ではなく後ろに立つ」という言葉がとても心に残っています。保育者が前に立って引っ張っていくだけではなく、子どもの後ろ姿をそっと後ろから見守ることも保育者の大切な役割なのだと今回の実習で私は感じました。保育者がやってあげ教えてあげるのは簡単ですが、子どもの力を信じて背中を押してあけることこそが、子どもの成長につながると思いました。そして、その成長を間近で見ることができ、子どもの「できた！」を一緒に喜ぶことができる保育者という仕事は、とてもやりがいのある素敵な仕事だと思います。子どもの笑顔が見られることは何よりの喜びだと思いました。

この学生のように、すべての学生が保育のやりがいや喜びを感じられることが理想である。現実の厳しさはあるが、学生の力を信じて背中を押したい。

● *Profile*

松田　純子（まつだ　じゅんこ）
実践女子大学　教授
専門は保育学、幼児教育学。保育所や幼稚園などの集団保育に限らず、子育てや家庭教育を含めて広く保育という営みを捉え、子どもにとっての様々な保育体験の意味について研究を行っている。最近の研究テーマは、「幼児期の基本的生活習慣の形成としつけ」、「保育における紙芝居の今日的意義」など。

これからの保育者を育てるために ～保育現場における実習指導の共通理解と改善の試み～

吉田　龍宏

保育者養成の中で、あるいは保育者のキャリアの中で保育現場における実習は保育者を目指す学生にとって大きな意味を持つ。しかし、近年実習指導について困難さを感じさせることがある。例えば、養成校からの「実習を終えた学生が自信を喪失して保育職を目指すことを諦めた」という意見や実習園からの「実習生にどこまで指導してよいのかわからない」「養成校ごとに実習記録の様式やその使い方に差があり、指導しにくい」という意見である。また、実習園による評価基準の捉え方の違いについて聞くことも多い。

こうした困難さは養成校・学生・実習園・実習指導者の間にある実習に対する考え方や意識のズレから生じているのではないか。養成校で指導する教員とそれを学ぶ学生、実習園で指導する実習指導者が実習指導の内容や意図を十分に共通理解していなければ、前述した実習指導の困難さは解決しない。

こうした課題を受けて、愛知県あま市では公私立の主任保育士会を中心として実習指導の在り方を実習園の側から見直し、市内の保育所・認定こども園で実習指導に当たる保育者の共通理解を図り、より質の高い実習体験を提供するよう工夫をしている。

初めに共有したことは「実習生は資格取得の途上にある学生」ということである。実習生は不十分さがあって当たり前で、この理解があってこれからの保育者を育てるより良い実習指導の在り方や評価の基準を検討することができるのである。

特徴的な取り組みを、あま市が作成した「保育実習のしおり」の中から４つ紹介したい。

「オリエンテーション」では園概要などはなるべく印刷して渡し、実習生と保育者が話すことや実習生が子どもと関わることに時間を充てた。実習に向けて保育のイメージをより具体的に実習生が持つことができるようにしたいという意図である。

「実習内容」では市内の園で保障する実習内容を保育実習ⅠとⅡそれぞれで検討した。その中で、各実習２～３日目に、実習園の保育を理解し、観察・参加や記録を通して学んでほしい視点を実習生に伝えるため、主任等が実習生と共に保育を観察し、実践を一緒にみながら説明をする機会を設けた。また、保育実習Ⅰではその目的に鑑み、手遊び・絵本等の保育の基本となる実習を１回のみとすることとした。

「実習記録」と「指導案」では実習生に何を学んでほしいのか、そのためにどのような書き方を求めるのかという視点に立って、新たな実習記録・指導案の様式を作成し、「保育実習のしおり」に指導前と指導後の作成例や実習反省会のポイントを示した。様式や具体例の作成過程で、保育者を目指す学生に記録や指導案の作成・振り返りでどのような経験や指導が必要なのかを検討したことで、保育者も実習生も書類の作成を学びに繋げやすくなったと思う。

作成した「保育実習のしおり」を活用して実習指導に１年間取り組んだ。その課題や実習生・保育者へのアンケート結果から「指導資料」を作成し、研修を行い実習指導の更なる共通理解が図られるよう取り組んでいる。

実習指導の見直しは、各園の特色や保育実践の基本を再確認し、特に主任保育士にとっては保育者への指導を見直す機会となる等、現職の保育者の育ちにも繋げることができた。今回の取り組みが養成校・学生・保育者・実習園４者間の実習に対する共通理解を更に促すものとなっていくことを期待したい。

● *Profile*

吉田　龍宏（よしだ　たつひろ）
（名古屋学院大学准教授　愛知県あま市美和こども園理事長・園長）
研究領域は保育実践学（特に保育施設における集団保育の中で遊びを中心とした保育の実践的検討）、保育経営・施設長に関する研究、保育制度など。
園内研究会を通して保育や保育者の育ちの支援の在り方を検討している。

「いい保育者」とは… ー施設実習の教育活動を中心にー

吉田　祐一郎

筆者が所属する四天王寺大学は大阪府羽曳野市にある、聖徳太子が建立した四天王寺四箇院のひとつ、敬田院での仏教精神に基づいた大学です。保育士養成としては、大学の教育学部教育学科幼児教育保育コース（1学年定員60名）と、短期大学部の保育科で行っています。

大学の保育者養成では、「いい保育者」をめざして、いい保育者について学生が問い続ける教育活動を進めています。保育現場の経験としては、1年生にハローナーサリーとして保育所への体験見学を、２年生には週１回のインターンシップで保育所・認定こども園や幼稚園での経験ができるカリキュラムを設定しています。

その経験を踏まえて保育実習Ⅰの保育所を２年生の２月頃、施設実習を３年生の８月頃に実施し、その後に保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（施設）を３年生の２月頃に参加します（すべて配属実習）。

そして「保育実習指導Ⅰ（施設）」（全15回）の事前指導では、最初の保育実習Ⅰの保育所実習での学びや自身の課題などを振り返ることで、保育の基礎と姿勢を理解します。その上で、実習先である社会的養護関係の施設理解として動画等も踏まえて解説しています。また、過去の実習生が作成した「先輩

によるアドバイスシート」（後説）を踏まえて、実習での学びの内容や視点の理解を促しています。そのような取り組みで各学生が実習への意識を持つとともに、実習計画書の作成（複数回の添削指導を実施）により、各々の学生が具体的な実習目標を定めています。このほか子どもや利用者の生命を守ることを理解するため、消防署による普通救命講習を行っています。また、施設の生活支援で必要な調理や掃除について積極的に取り組むように指導しています。

実習後の事後指導では、実習報告書の作成、実習自己評価票（実習施設による実習評価と同じ項目を設定し、各項目を学生が具体的に言語化して自己評価を行う）の作成などに取り組んでいます。このほか「先輩によるアドバイスシート」の作成を行い、各実習種別や施設ごとの生の声を書くことで、後輩に経験を伝える工夫をしています。このシートは学生の実習振り返りや実習先の個別のカルテ機能もありますが、学生は後輩に自分たちの体験を伝えたいという想いが含まれ、作成する際の学生の意識も高くなっているようです。

なお、本学では保育実習Ⅲ（施設）の実習種別は、保育実習Ⅰ（施設）と区分できるようにしており、児童厚生施設や地域子育て支援センターにおいて子どもの遊びや子育て支援についての学びや、児童発達支援センターや放課後等デイサービスでの障がい児の療育に関する学びができるようにしています。このような施設の種別の工夫もあり、約３割の学生が保育実習Ⅲ（施設）を選択しています。

実習機会以外でも、科目「社会的養護Ⅱ」（全15回）を近隣の児童養護施設の職員（施設長および心理職）に講義依頼するなど、福祉施設での援助実践に関する講話を設けています。

これらの４年間の取り組みを通して、保育者に求められる多様な子ども理解と子ども支援、子育て家庭支援に関する専門性を高めるとともに、保育ソーシャルワークなど関連領域についての実践的理解を図っています。

今後も保育実習全体を通して、「いい保育者」とは子どもを心から尊重し、専門性を持って支援できる保育者であることを位置づけた教育活動を進めていきます。

● *Profile*

吉田　祐一郎（よしだ　ゆういちろう）
四天王寺大学教育学部教育学科准教授。中部学院大学大学院人間福祉学研究科修士課程修了、同博士課程満期退学。児童相談所一時保護所・児童福祉施設での勤務、名古屋文化学園保育専門学校講師、足利短期大学講師などを経て現職。日本保育ソーシャルワーク学会理事、全国児童養護問題研究会監査委員ほか。研究テーマ、子ども家庭福祉・地域福祉。

実習生・実習園が互恵性のある実習日誌 ～大私幼実習ガイドライン日誌を例に～

北島　孝通

実習は、幼稚園教諭免許や保育士資格を取得するために、必ず行わなければならない。その実習で学生や現場教員を悩ませていることの一つに実習日誌がある。

学生は、現場に入って慣れない保育をしつつ、保育後に一日を振り返りながら実習日誌を記載しなければならない。「一日の流れを幅広く振り返りながら反省ができ、保育者の動きを確認できる良さはあるが、とにかく書くのに時間がかかる」という、当園教職員達が学生時代の思い出を口々に語る姿からも、実習日誌の苦労が推察される。

一方実習指導教員にとっても実習日誌は楽なものではない。もちろん学生の学びの為なので、実習日誌の確認に関してネガティブな対応をすることはない。ただ、普段の業務の上に確認時間を取っていることは事実であり、中には「実習生が保育中にメモしながらなので、どんどん内容が薄くなっていく」という実習日誌を前に、どのように添削したら学生のモチベーションを落とさず指導が伝わるかと悩む実習指導教員もいる。

当園では、実習生が保育を楽しみながら専門性を高め、なおかつ実習生や実習指導する教職員の作業時間が掛からないようにするようにするために、大阪府私立幼稚園連盟（以下大私幼）が作成した『実習ガイドライン』の実習日誌（以下大私幼実習日誌）を使用している。

この大私幼実習日誌は、大私幼加盟園、実習生、また実習生が所属する養成校からも肯定的な声をよく聞かせてもらえるので紹介したいと思う。

大私幼実習日誌の特徴は、従来の時系列に子どもの活動、環境構成、保育者の配慮を記載する形式ではなく、A4用紙一枚分の内容で、「自分自身の分かったこと・迷ったこと」、「クラスのねらい（園のねらい）はどこで見られたか」、「印象に残ったエピソード記録とその考察」、「環境構成の考察」等、子どもの姿を踏まえて具体的に視点を絞って記載する形式である。

実習生は、保育後の休憩中に30分程で記載して、記載後に担当教職員とその実習日誌をもとに振り返りをする。

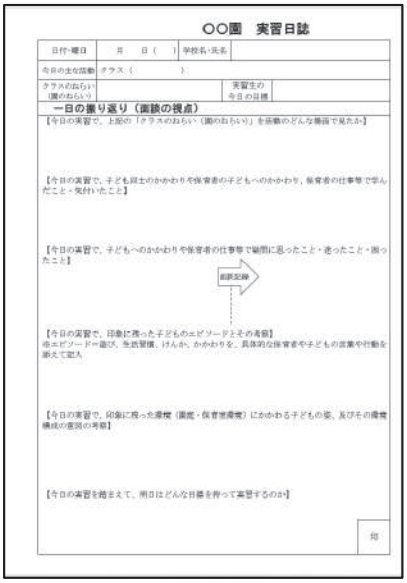
この実習日誌を使用した学生の意見として「思い出しやすいから書きやすい」、「どこが分からないか分かるようになった、援助方法など分からないことが指導教員に聞きやすい」、「今日の保育のねらいが自覚できるようになった」、「前の実習では保育者を見ていたが今の実習では子どもたちを見ている」との声が聞かれた。

一方の教職員側からも、「疑問や感じたこと等実習生の考えていることが分かりやすい」、「子どもの内

面を理解しようと考えられる」、「エピソードを通して実習生の視点が分かる」、「視点が決まっていることで、実習生と振り返りがしやすい」との声が聞かれた。また教職員が添削する時間も直接口頭伝達によって削減出来ている効果もある。

紹介した大私幼実習日誌は、働き方改革が問われるこの時代に、実習生や教職員共に質も保証しながら互恵性のある実践ではないかと思っている。

（大私幼実習日誌）


○○園　実習日誌

日付・曜日	月　日（　）	学校名・氏名	
今日の主な活動	クラス（　　）		
クラスのねらい（園のねらい）		実習生の今日の目標	

一日の振り返り（面談の視点）

【今日の実習で、上記の「クラスのねらい（園のねらい）」を活動のどんな場面で見たか】

【今日の実習で、子ども同士のかかわりや保育者の子どもへのかかわり、保育者の仕事等で学んだこと・気付いたこと】

【今日の実習で、子どもへのかかわりや保育者の仕事等で疑問に思ったこと・迷ったこと・困ったこと】

相談記録

【今日の実習で、印象に残った子どものエピソードとその考察】
※エピソード＝遊び、生活習慣、けんか、かかわりなど、具体的な保育者や子どもの言葉や行動を添えて記入

【今日の実習で、印象に残った環境（園庭・保育室環境）にかかわる子どもの姿、及びその環境構成の意図の考察】

【今日の実習を踏まえて、明日はどんな目標を持って実習するのか】

印

● *Profile*

北島　孝通（きたじま　のりゆき）
幼保連携型認定こども園 庄内こどもの杜幼稚園　園長
研究テーマ：トップリーダーのリーダーシップ、園マネジメント、組織開発

学生・養成校・実習園がともに学ぶ実習

田澤　里喜

2020年に大豆生田氏らとともに編者となり、複数の養成校の先生方に執筆いただいた『これからの時代の保育者養成・実習ガイド』（中央法規）を出版しました。この本の副題は「学生・養成校・実習園がともに学ぶ」です。実習を通して学生だけでなく養成校、実習園が連携しつつ、それぞれの学ぶ機会となることがとても大切だと考えたのです。

実習とはそもそも何でしょうか。前出した本では「実習は子どもたちの育ちに驚き、あそびにわくわくし、たくさんの学びを体験する場」（前出書 p.5）としています。

学生が実習を通して心動く体験をたくさんし、その体験から保育や子どものことをもっと学ぼうとすること、これが保育者を育てる原点になるはずです。しかし、この大切な実習のあり方が形骸化している部分があるのではないでしょうか。

たとえば、部分実習や責任実習がいわゆる一斉活動の指導を体験することが中心となり、その計画も子どもの姿を見ることなく、実習前に立案した内容を実践することも少なくないように感じます。また、日誌も書くための書式的なルールが多く、実習生がそれを守ることに必死になっていることもあるように思います。

このような形骸化が一部にみられる実習指導が今、変わろうとしています。そのひとつが写真と文章で記録する「ドキュメンテーション型日誌」です。玉川大学ではここ数年でこのドキュメンテーション型日誌に取り組む園が多くなってきました。それは多くの実習園が手応えを感じているからだと思います。

ドキュメンテーション型日誌は書式的なルールに縛られず、また情報量の多い写真を活用するので実習生の本当に心動いた出来事を表現しやすいことに特徴があります。それだけでなく写真があることで担当保育者との対話が増え、さらに、書くことが楽しいと感じた学生は実習終了後に日誌を見返し、より学びを深めていきます。このドキュメンテーション型日誌ですが、ある実習園が始め、それを養成校が取り入れたものなのです。

このように実習を前向きに捉え、実習生と実習園双方の学びになるような取組する実習園が増えたように感じています。たとえば、実習のねらいに応じて実習生が複数の日誌の書式から選べる園、園長先生と雑談しながら日誌を書けるように工夫している園、遊びのコーナーを実習生が担当し、環境構成などの体験を重視する園など、これらの園からは学生はもちろん養成校としても学ぶことが多いです。

こういった園は一部かもしれません。しかし、実習園と養成校がお互いから学ぶことはこれからの保育者を育むことにも保育の質の向上にもつながることだと思います。さらに実習園と養成校がもっと「実習で何を学ぶのか？」といった原点を踏まえた対話をすることも大事なことだと思うのです。

その必要性に気がついた数年前の出来事があります。ある時、実習園の園長先生から「責任実習は一斉活動を担当させないといけないのか」との内容の質問をもらいました。もちろん、そんなことはないのですが、ここから「責任実習の本質的な学びとは？」「一斉活動とはなにか？」といった実習や保育のことを共に話ができたことはとてもよい学びの機会でした。

地域によって実習の状況は異なると思いますが、保育の本質はどこでも変わらないはずです。だからこそ、あらためて養成校、実習園が対話的に保育の原点について考えることがこれからの保育者を育てる一歩になるのではないでしょうか。

● *Profile*

田澤　里喜（たざわ　さとき）
玉川大学教育学部教育学科　教授・学校法人田澤学園　東一の江幼稚園　園長
1996年玉川大学卒業後、玉川学園幼稚部に担任として勤務後、東一の江幼稚園に移る。また2005年より玉川大学教育学部に勤務、2015年より東一の江幼稚園園長に就任。研究テーマは保育実践と園長の役割

これからの保育者が育つための リーダーの役割

安達　譲

私たちが園で共に暮らす子どもたちが社会に出る未来の社会では定型の仕事は機械やロボットに任せて、自分らしさや人間らしさを発揮して生きていく社会になっていることが予想されますので主体性やコミュニケーション能力等の非認知能力が幼児期に育まれなくてはなりません。そのような能力が育まれる環境として子どもの身近に居る保育者自身が同僚との良い関係に支えられて、自分らしく主体的に日々を生きることはとても重要で、子どもの主体性を育む上で主体的な保育者の存在は必須の条件だと思います。そして、子どもが育ち合う仲間なしに一人では育つことが難しいように、保育者も一人では育つことができません。近年、新任や若手が短期間で離職するという話がしばしば聞かれるようになりましたが、疲弊して短期間で辞職してしまうことは本当に残念なことです。人が病気になったときにはどんな名医であっても患者から熱や咳等の症状を教えてもらえなければ薬を処方することもできません。園の職場の雰囲気が温かく、同僚同士の関係が良ければ、自分の悩み（症状）を打ち明けて、先輩から様々なアドバイス（薬）をもらって、もう一度保育に向き合えたかもしれません。悩みを言わなかった（言えなかった）のが悪いとするのではなく、悩みを言える（＝悩みを受け止めてもらえる）園の風土を醸成することは園のリーダーの役割としては大変重要だと思います。

保育は一人ひとりの子どもや家庭と深く関わり、子どもが育つ姿が嬉しい幸せな仕事ですが、反面、責任が重く要求される専門性は年々高くなっています。園としての方向性を示していくことや保育者個々の悩みに対応していくことは重要ですが、保育という仕事の喜びから保育者の意欲を高めていくこともリーダーの役割として重要です。「今は悩んだり大変だったりするかもしれないけれど、あなたが誠実に一人の子に一生懸命向き合っていること、それ自体がとても尊いことで、子どもの成長を支えているんだよ。」ということに気づいてもらいたいと思います。

また、人が育つためには育つ仕組みが園内にあることも重要です。教育や保育が「子ども理解」に基づいて「ねらい（願い）」を持ち「関わり（環境の構成や支援）」を考えるという構成になるのと同様に、個々の新任の現状を理解した上で（実態把握）、園の保育者として身につけてほしい子ども観や保育に対する姿勢、スキル等（ねらい）を身につけてもらうために、先輩たちがかかわる（支援する）ことを園内で共有したいものです。昭和な「観て学んで！」というような育て方（ライオンが谷に突き落としてのような）にも良さはあるのですが、令和の時代には育つことを仕組みとして整えたり、育てる側の資質や学ぶ内容をリーダーとして整えていく必要があると思います。

● *Profile*

安達　譲（あだち　ゆずる）
幼保連携型認定こども園　せんりひじり幼稚園・ひじりにじいいろ保育園　園長
大阪教育大学非常勤講師　箕面市保育幼児教育センタースーパーバイザー
研究テーマ　園内研修、人材育成、リーダーシップ、公開保育、プロジェクト保育

リレー討論　「教育・保育の無償化」―令和時代の保育学Ⅸ 多様化する保育ニーズに対応する人材確保と管理職のマネジメント

井上　眞理子

リレー討論を振り返る

「教育・保育の無償化」は、すべての子どもが、保護者の経済状況に左右されずに、就学前教育を受けられることを推進する仕組みである。『幼児教育・保育は公的な支えによってこそ「質」を高め、また、それは将来、国に大きな果実を生むプロセスを創る』こと、この制度によって就学前教育の質向上の可能性を黒田氏は示唆している。しかし、教育・保育の質保障の議論の中で展開されるはずの無償化が、結果的には、矢藤氏の説明の通り、『保護者の負担軽減』すなわち『施設利用料の無料化』に着地してしまった。保護者としては、「良質の教育を受けられるようになった」という認識ではなく、『タダで子どもを預けられる』という「お金」の面での恩恵が、実感として強いだろう。この点は、太田氏の指摘の通りだと思う。

超少子化社会に突入した我が国において、教育費の負担軽減は、子育てしやすい社会環境整備の一環である。子どもを持つことへの保護者の不安を少しでも取り除くという効果は期待できる。『タダで子どもを預けられる』という保護者のこの実感が、本来の目的であった教育・保育の質の向上に逆風として影響を与えてしまうのではないか。本稿では、このリレー討論の中で示されている「手放しで喜べない」「釈然としない感覚」を、もう少し掘り下げていきたいと思う。

子育ての「外注化」と保育の質

次世代育成支援対策推進法と少子化社会対策基本法が、2003年に成立した。その基本理念に関する条文において、「親の第一義的な責任」が規定されている。教育基本法の2006年の改正では、その第10条において「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有する」とされた。この解釈と動向については、様々な見解があるが、法制度上は、子どもの教育、子育ての第一義的な主体は、保護者であることを明示している。太田氏が、この点を慎重に検討しながらも、『無償化が安易な「人まかせの子育て」になってしまわないように』と指摘しているのは、保育の本質にある「子どもの最善の利益」の保障がどこまで尊重されるのか、親育ちの機会が奪われ、結果として親子・家庭関係の構築が未熟化してしまわないか、すなわち、家庭教育の質の低下が懸念されるからだと、私は理解している。

一方で、子育てが家庭に「密閉」されすぎる危険性にも言及したい。我が国では、虐待や貧困、歪んだ親子関係に対して、外部が介入することが難しく、結果的に「子どもの最善の利益」を守ることができない悲しい現実がある。あるいは、かつて私が経験した過熱化した早期教育に取り組む家庭においては、親の価値観や枠組みの中でしか、自分を表現し、自分らしく生きることを許されず、結果として、自己肯定感、人間関係の構築力を獲得できずに苦しんでいる子どももいる。

生きる力の基礎を培う乳幼児期には、家庭という枠組みを超えて、多様な人間に出会い、多様な経験機会や価値観に触れ、自らの「生き方」を広い選択肢の中から創り出す機会を重視することも必要である。そう考えると、この時期の子どもの育ちの場として、保育施設の意義と可能性は意味深い。

子育ての「受け皿」を担う保育者の確保

「子育ての外注化」が進む先にあるのは、外注された子育ての「受け皿」の問題である。「受け皿」の担い手、保育者の確保の課題である。超少子化社会においては、幼児教育・保育のニーズは減少傾向に向かい、保育者不足の問題も、緩やかに解消されていくかもしれない。しかし現状では、まだまだ雇用・採用の問題に苦しんでいる現場も多い。制度が「子育ての外注化」を加速させるのであれば、同時にその「受け皿」を確保する仕組みづくりを急ピッチで考えなければならない。

その一つが、保育者に対する社会的な評価である。処遇改善もその一つであるが、それに加え、心理的側面も考えたい。つまり、現場感覚での社会的評価、すなわち、保護者からの保育者に対するリスペクト（感謝・敬意）は、心的作用として、保育者の手応えや直接的な実感となる。一部の保護者の中にある「教育・保育＝サービス」という感覚は、保育者の疲弊感を倍増させる。

保育現場においては、保護者と共に子どもを育てる関係づくりに尽力している。「タダで預けられる」という保護者の感覚が、「当たり前」という誤解を生み、この関係性構築に対してマイナスに作用する可能性はないのだろうか。人間関係は、一方通行では成立しない。保護者も保育者も、相互にリスペクトし合う関係性の実現に、どう影響するのか。いかなる制度も万能ではないが、「教育・保育の無償化」がなにやら釈然としないのは、この点にあるように思う。

多様なニーズに応える管理職のマネジメントと保育の質

中坪氏は、『「教育・保育の無償化」は、多様な保育ニーズを刺激し、保育関係者にとっては<拡張>した保育実践が待ち受けている』と論じている。長時間化・多様化・複雑化する保育に対応するためには、現場の「柔軟な対応力」が必要となる。職員の働き方ひとつとっても、時期によって、時間帯によって、必要となる働き手の量と質が変動する。刻々と変化するニーズに応えるためには、短時間労働の職員や保育補助など、業務を「分化」し、担ってもらうことになる。シフトを例に取っても、その「分化」の複雑さは計り知れない。

しかし、「分化」したものは、必ず「統合」しなければならない。保育者の関わりが、「分化」される傾向にあるのだとしたら、それを「統合」し、子どもの生活の実態や全体を把握する必要がある。情報共有や対話は、その「統合」をするために必要である。

一人ひとりの職員の特性を活かし、組織をつくる園長をはじめとする管理職の役割は、保育の質向上に不可欠である。それに加え、現場の職員体制の多様化が加速する。何を、どの程度、「分化」させる必要があるのかを、教育的な意義を含み、戦略的に考える。さらにそれらをどのように「統合」するのか、その仕組みを構築し、実践しなければならない。「分化」と「統合」は、自然発生的には起き得ない。自園にあった「分化」と「統合」のシステムを構築することが、マネジメントの一翼である。複雑化する組織としての園運営が求められる令和時代、管理職のマネジメント能力や役割が与える、保育の質への影響力は大きい。

● *Profile*

井上　眞理子（いのうえ　まりこ）
洗足こども短期大学　教授
厚生労働省　保育士等養成課程検討会構成員
専門領域は、教育学、保育学、成人教育学。研究関心は、保育者の専門性と人材育成、管理職のリーダーシップ、保育の質向上のための組織マネジメント。

私の文献リストから

このコーナーは、保育実践の発展のために会員諸氏が読まれている参考文献の紹介を目的とします。

勝浦眞仁（桜花学園大学　教授）

【研究内容】

「共に生きる」という関係性に着目した特別支援教育・保育のあり方を探る研究を行っています。これまで小・中学校や保育園・幼稚園・認定こども園等の就学前施設の場で関与・観察を行い、発達障碍を中心に、配慮を要する幼児・児童とその子の先生や周囲の子どもたち、私自身とのやり取りをエピソード記述してきました。そこから、配慮を要する子どもと周囲の人たちとの間には相互主体的な関係を生み出していく難しさがあること、さらに、両者の間に生まれてくる「生きづらさ」を和らげていく「共に生きる構え」を私たちが持つ重要性を述べてきました。「共に生きる」ことを通して、他者に対する信頼感と自身に対する自己肯定感という両面の心の育ちが、配慮を要する子どもたちにも徐々に芽生えてくるとともに、その心の育ちが、親や保育者の前向きな子育てや保育への原動力になると考えています。

このような「共に生きる」かたちを探っていくために、知的障碍および発達障碍（IDD）のある子どもを育てる親の well-being に関する研究に取り組んでいます。IDD のある子どもをもつ親の well-being は、定型発達の子どもを育てる親に比べて低いという指摘がなされています。IDD のある子どもを育てる親の内面には２つの心性があり、「障碍児の親」として我が子に障碍のあることを受容し、その状態に適応しようとしている面のある一方で、障碍があろうとなかろうと「この子の親」として我が子と生活を共にし、受け止めていこうとする面もあることをインタビュー等から実感してきました。これら２つの心性の狭間で揺れ動きながら、特に後者の心性において、我が子「らしい」姿を子育ての中で見出していこうとする親の視点や、園に「我が子がいる意味」を実感することを大事にする親のありようを学ばせていただいてきました。

学校や就学前施設の先生方と保護者、研究者とが三位一体となって協働する研究活動をこれからも目指していきたいと思います。

文献リスト

1．M. メルロ＝ポンティ、滝浦静雄・木田 元・鯨岡 峻訳（2019）大人から見た子ども．みずず書房
2．鯨岡 峻（2016）関係の中で人は生きる―「接面」の人間学に向けて―．ミネルヴァ書房
3．浜田寿美男編著（1992）「私」というもののなりたち．ミネルヴァ書房
4．C. トレヴァーセン・K. エイケン・D. パプーディ・J. ロバーツ、中野 茂・伊藤良子・近藤清美監訳（2005）自閉症の子どもたち　間主観性の発達心理学からのアプローチ．ミネルヴァ書房
5．綾屋紗月・熊谷晋一郎（2008）発達障害当事者研究―ゆっくりていねいにつながりたい．医学書院
6．S. マロック・C. トレヴァーセン、根々山光一・今川恭子・蒲谷槙介・志村洋子・羽石英里・丸山慎監訳（2018）絆の音楽性　つながりの基盤を求めて．音楽之友社
7．帚木蓬生（2017）ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力．朝日新聞出版
8．鯨岡 峻・大倉得史編著（2021）接面を生きる人間学「共に生きる」とはどういうことか．ミネルヴァ書房
9．J. グリフィン（2021）Day by Day Emotional Wellbeing in Parents of Disabled Children. Free Association Books
10．村上靖彦（2021）交わらないリズム　出会いとすれ違いの現象学．青土社

会報第 186 号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

①海外リポート
研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

②新刊図書の紹介
過去２年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

③私の文献リストから
研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介ください。文献は、著書、論文など 15 冊（編）以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている（関心をもっている）分野についても、お書きください。

〔字　数〕 ① 800 字以内（写真 1 葉は 200 字に換算）
② 400 字以内
③ 800 字以内
〔締め切り〕 2023 年 2 月 28 日必着
〔送付先〕 Mail：hoiku.info@jsrecce.jp ※今回からアドレスが新しくなっています※
作成いただくデータは Word（windows）ファイルでお願いします。ファイル名にご自身の氏名を記載してください。
メールには、氏名、会員 ID を明記してください。

第76回大会を開催するにあたって

大会実行委員長　伊藤　良高

近年、社会経済情勢の変化に伴い、家庭や地域を取り巻く環境の変化のなかで、乳幼児期の子どもの育ち及び子育てめぐる状況が厳しくなっていることが指摘されています。

例えば、2018年6月に閣議決定された「（第3期）教育振興基本計画」は、乳幼児期の子どもの育ちをめぐる状況について、「幼児の発育に関しては、社会状況の変化等による幼児の生活体験の不足等から、基本的な技能等が十分身に付いていないという課題が指摘されている。また、近年、国際的な研究成果などから幼児教育への重要性への認識が高まっている」と述べています。また、令和2年度文部科学省委託調査として実施された「令和2年度『家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実に向けた保護者の意識に関する実態把握調査～』」（2021年2月）では、家庭教育について、①片働きの家庭では、平日の子育ての分担をほとんど自分で対応している割合が高く、精神的な負担を感じやすく、子育てについての悩みや不安を感じる割合も高い。②一方、共働きの家庭では、時間的な余裕がないため、子育てに十分な時間が取れないと感じているといった現状が示されています。

上述の状況にあって、子どもが安心して生まれるとともに、子ども同士が集団のなかで育ちあうことができるよう、また、家庭における子育ての負担や不安、孤立感を和らげ、保護者がしっかりと子どもと向きあい、喜びを感じながら子育てをすることができるよう、子どもの育ちと子育てを行政や地域社会をはじめ社会全体で支援していくことの大切さが唱えられています。人間形成における乳幼児期の固有性や重要性を踏まえ、就学前における全ての子どもの健やかな育ちを保障する保育・幼児教育（以下、保育）及び保護者に対する子育て支援が求められています。

ここにおいて、現代における保育の理論と実践並びに両者の関係において要請されているものとははたして何なのでしょうか。第76回大会の大会テーマ「保育を創る、未来を拓く～保育学の創造をめざして～」は、予測困難で先行き不透明な社会にあって、子ども・保護者・保育者（保育士・幼稚園教諭・保育教諭など）の「権利」という視点から、国民的レベルで、新時代の保育をデザインし、創造していくことをめざそうとするものとなっています。そして、そのために、学としての保育のこれまでを振り返り、実証的な知見や成果に基づいた保育の理論的・実践的研究の発展と深化に不可欠な「道標」を模索していくことが大切であると捉えています。保育に携わる全ての人たちが集い、多いに語りあうことで、学際的で総合的な性格を有する保育という世界をさらに深めていきたいと考えています。

今大会では、熊本での開催ということもあって、熊本から全国に向けて情報発信するといった内容のものがいくつか盛り込まれています。1つめは、熊本慈恵病院院長・蓮田健氏による基調講演『「いらない赤ちゃん」「いてもらっては困る赤ちゃん」を救えるのか』です。生命を守り育てる「こうのとりのゆりかご」が開設されて10年が経ちましたが、困窮する母子を救うため、この取り組みがめざすものは何か、相談窓口や内密出産など、母子を包括的に支える仕組みづくりについて、蓮田氏のお考えをご披露していただきます。2つめは、実行委員会企画シンポジウム「新時代の保育とソーシャルワークを展望する―（仮題）」です。熊本が研究の盛んな地域の1つとなっている「保育とソーシャルワーク」の理論と実践の現段階について、研究者、保育者、自治体職員、保育ソーシャルワーカー各々のお立場から自由に語り合っていただきます。そして3つめは、実行委員会企画特別パネルディスカッション「Soc.5.0における保育学の位置づけ（仮題）」です。熊本市の教育改革や保育実践、さらには乳幼児教育をめぐる国際的な動向を踏まえながら、教育学とのつながりから創造する保育学の未来を展望していきます。

上記以外にも、実行委員会企画対談・シンポジウムや学会企画シンポジウム、国際シンポジウム、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表など、本学会ならではの数多くの企画や内容が予定されています。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンライン開催のため、直接お会いすることはかないませんが、たくさんの会員の皆様のご参加を心からお待ちいたしております。どうぞよろしくお願いいたします。

● *Profile*

伊藤　良高（いとう　よしたか）
一般社団法人日本保育学会第76回大会　実行委員長
熊本学園大学社会福祉学部教授、熊本学園大学大学院社会福祉学研究科教授、熊本学園大学付属中学校・高等学校長、桜山保育園理事長・副園長、名古屋大学博士（教育学）、日本保育ソーシャルワーク学会会長。専門は保育学・教育学（保育制度・経営論、幼児教育行政学、保育ソーシャルワーク論）。主著に『保育制度改革と保育施設経営』、『増補版幼児教育行政学』、『保育制度学』。

■第76回大会開催案内■

2023年5月13日（土）・14日（日）
熊本学園大学（オンライン開催）
大会テーマ：保育を創る、未来を拓く～保育学の創造をめざして～

◆オンライン開催の方法について

自主シンポジウムや口頭発表は大会開催期間の前に、動画を作成し、オンライン上で大会参加者に公開していただきます。ポスター発表も事前にポスターを作成、公開いただきます。また、各発表者には、大会当日にオンライン上で質疑応答を行っていただきます。これらをもって、学会報告をしたものとみなします。

◆直前参加登録について

2023年4月頃開始予定です。
支払い方法はクレジットカード払いのみとなります。

詳しくは、大会ホームページ及び第3号通信（2023年2月予定）をご覧ください。

第76回大会ホームページ：http://confit.atlas.jp/hoiku76

新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

『保育実践へのナラティヴ・アプローチ』

二宮祐子 著
新曜社　2022年6月

研究方法論を学ぶ上で、ぜひ読んでおきたい1冊が、また増えた。

本書は、日常的に行われている保育実践に光をあて、保育者と保護者、保育者と子どもとのやりとりの中に埋め込まれている保育者の専門性を、ナラティヴ・アプローチの切り口によって明らかにしている。

保育実践中の「語る行為」や「語り方」に関する研究はこれまでにも蓄積されてきているが、ナラティヴ・アプローチという立場を明確にして、各実践の個別具体的な有り様を取り出している点は、大変興味深い。第1章では、ナラティヴ・アプローチが社会学の分野でどのように発展してきたのか、先行研究を紐解きながら丁寧に記述されている。2章～5章においては、対話的ナラティヴ分析、多声的ナラティヴ分析、パフォーマンス的ナラティヴ分析、ナラティヴ・エスノグラフィー等の分析手続きにも触れられており、ナラティブ・アプローチに着手する際の手がかりが示されている点は非常にありがたい。

田島　美帆（広島大学大学院生）

『平成期日本の「子ども中心主義」保育学：1989年幼稚園教育要領という座標系』

吉田直哉 著
ふくろう出版　2022年3月

「子ども中心主義」とはいかなる保育思想であったのか――本書は10名の論者に即して、平成期の「子ども中心主義」の思想展開を追った研究書である。本書で「子ども中心主義」の保育思想は、89年要領の前提となる社会観を提示した河野重男から、89年要領策定の当事者の岸井勇雄、高杉自子、森上史朗、大場牧夫、小林美実、中沢和子に光を当て、さらに小田豊、大場幸夫と辿り、無藤隆に至って平成期の「子ども中心主義」保育学が到達点を迎えるという筋道で示される。平成期の「子ども中心主義」保育学が創出した「子どもの自発性」・「環境」等の概念が、そもそも何に対峙してどのような含意で提起されたものだったのか、著者は各論者の議論に即して示している。本書は、今、改めて89年要領を多角的に検討するための足場を与えてくれた。「子ども中心主義」を保育方法論として構築するのは可能か――本書の問いかけは、令和に生きる我々に向けられている。

安部　高太朗（郡山女子大学短期大学部）

海外リポート

EECERA 学会参加報告

髙橋　陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

2022 年 8 月 23 日から 26 日までイギリスのグラスゴーで開催されていたEECERAに参加した。23日は、何カ所かの保育施設訪問が準備されており（申し込み制）、私は Kirkintilloch という街にある Lairdsland Early Years Centre を訪れた。先進的な施設、遊び重視、保育者の温かい視線・言葉かけにあふれており、のびのびとその子らしく過ごす様子が見られた。

今回の学会で私たちのグループ（小玉・佐藤・髙橋）は、24日のPoster Symposium Set 1の中で「Documentation in Japan : Focusing on the significance of dialogue」を発表した。当園で毎日行っている保育の振り返り＝記録の方法について、その実際と教員たちのインタビューによって導き出した意義をまとめたものである。興味を示された方々との語り合いの中で「子ども同士の関係性に注目していることはすばらしい。ヨーロッパは、一人ひとりにフォーカスはするが、子ども同士のつながりにはあまり着目していない」という言葉は印象的である。ポスター数は、2 日間で 51 枚。ポスターは余裕を持って貼られており、対話するには十分なスペースがあったことも付記しておく。

次にシンポジウムについてお伝えする。2 日間で 141 のセクションに分かれ、各 3 ～ 4 の発表があった。スタイルは、日本保育学会の口頭発表と同様であった。意見交換タイムは、それぞれの国の幼児教育の現状や課題、発表内容について、次々と手が挙がり、活発に発信、応答がされていた。

日本の幼児教育を国際的な場で発表することの重要性を感じた。今後も継続して発信を続けたい。

◆主要国際保育系学会への若手派遣について◆

日本の保育学研究の進展のため、海外の保育学系の学会等で研究発表をする若手会員の支援をしています。
　募集期間：1 期：2 月～ 5 月、2 期：6 月～ 9 月、3 期：10 月～翌年 1 月
　金　　額：1 名につき、上限額 10 万円
　条　　件：筆頭発表者として研究発表を行う
申請希望者は、学会ホームページ「会員の皆様へ」→「各種委員会関係」→「国際交流委員会」→「国際交流若手派遣について」をご覧ください。http://www.jsrec.or.jp/?page_id=940

◆学生会員の登録（年会費の学生割引）申請について◆

学生会員の登録は、年度毎の申請が必要です。2023 年度学生会員の登録を希望される方は、以下の手順で申請してください。
（1）　学生証（入会希望年度の有効期限内であること）を両面スキャンし、学生証画像データを準備してください。
（2）「会員専用ページ」よりログインしていただき、「会員情報」の指定箇所に学生証画像データをアップロードしてください。
（3）　Mail に学生会員登録申請書（学会 HP よりダウンロード）を添付して、事務局に学生証画像データをアップロードした旨をご連絡ください。
学生会員登録申請書はこちら：
http://www.jsrec.or.jp/?page_id=63
Mail：hoiku.info@jsrecce.jp
※今回からアドレスが新しくなっています※

受付期間　2023年 4 月 1 日～ 4 月 10 日

※申請が受理された方は、年会費が学生会員価格（6,000 円）となります。
　期日を過ぎた場合は、一般会員での登録となります。

学　会　記　事

開　催　報　告

北海道・東北地区ブロック
第１回研究集会

「With コロナ時代の公開保育研究会のあり方を探る」開催報告

本研究集会は、保育の「いまここ」を発信する公開保育をリモートで開催し、今後の公開保育の在り方の検証を目的として実施した。参加者は 81 名（リモート 77 名（内非会員 21 名）、対面４名（福島県内者）、※リモート参加者数は割り当て PC の台数である）。当日の公開保育、協議、助言の内容は以下の通りである。

日時：2022 年 10 月 13 日（木）10:00 ～ 14:30
　公開保育① 10:00 ～ 11:00　協議　　11:10 ～ 12:00
　公開保育② 12:50 ～ 13:20　講師助言 13:30 ～ 14:30
公開園：福島県大沼郡会津美里町　認定こども園ひかり
　　天笠昌明（園長）他、教職員
講師：大方美香（大阪総合保育大学）
企画・進行：磯部裕子（宮城学院女子大学）
　　井上孝之（岩手県立大学）
映像配信：木村　創（向山こども園）
運営協力：（学）仙台みどり学園

公開保育①は、主幹教諭が園内を案内する形で進め、磯部氏は園庭の遊びを、井上氏は保育室を回った。公開保育②には案内人が付かず、４歳児、５歳児がその日の振り返りをしている様子をライブで中継した。担任と遊びを振り返る豊かな時間が流れた。協議はウェビナーを用い、参加者からの質問に応答する形式とし、「保育について」「リモート公開について」の２つで協議を進めた。参加者には事前に、園紹介・園の見取り図・週案・月案・園改革の取組み等の資料を配付しており、それらを手元においてライブ映像を視聴することが可能であった。そのため、質問も具体的なものが多く、内容の深い協議が行われた。最後に、講師の大方氏から、子ども主体と保育の質を目指した公開園の挑戦的で丁寧な取組みに労いと感謝の言葉が送られた。これらを通して、オンラインの公開保育の在り方を参加者と共に検証できたと考える。なお、公開保育はライブ配信が原則と考え、アーカイブの公開は実施していない。

開　催　案　内

日本保育学会中部地区
第６回研究集会

日時：2023（令和５）年３月 21 日（火・祝）
　　13 時～ 15 時
会場：オンライン（Zoom）　※上限 300 名
テーマ：戦争と保育、そして子どもたち
登壇者：愛知県立大学名誉教授　　清原みさ子
　　元愛知県半田市立幼稚園長・
　　元名古屋短期大学教授　　宍戸洋子
司会者：名古屋市立大学大学院教授　　上田敏丈
参加費：無料
申込期限：2023 年１月 20 日（金）～３月 20 日（月）
※非会員の参加可
申込方法：以下の QR コードからお申し込みください。
※定員に達し次第終了
問い合わせ先：日本保育学会中部地区
　　chubu.hoiku@gmail.com

＜お誘い＞ウクライナ情勢が激化する現在です。
　　戦争と保育の問題・幼い子どもの平和教育のことを考えてみませんか。

編集後記

185 号をお届けいたします。184 号より電子化となり、ホームページへの掲載、URL をメールでのお届けとなりました。編集委員長としては、紙媒体から電子媒体となることで、購読率がどのように変化したのか、電子化によるメリット・デメリットがあるかと思います。そのような声もお聞かせ頂ければ幸いです。

広報委員長
名古屋市立大学　上田　敏丈

編集：広報委員会
上田敏丈　有村玲香　伊藤能之　亀山秀郎
木村創　佐久間美智雄　松山由美子
広報委員会協力委員
柴田賢一

一般社団法人日本保育学会中部地区理事・評議員会
第6回中部地区研究集会

2023.03.21
戦争と保育、そして子どもたち

13-15時　オンライン（zoom）
参加費無料・上限300名

　長期化するウクライナ情勢、世界各地で起こっている紛争など、今の世界は決して平和ではありません。連日報道される戦禍の様子や犠牲者の痛ましい姿をみて、保育学の理論と実践研究に携わっている私たちは、現地の人々や子どもたちに思いを馳せ、「平和な社会」「安心して暮らせる状況」が戻ってきてほしいと願わずにはおれません。
　日本では1931年の満州事変の勃発以降国家による戦争が15年間の長きにわたって続き、1945年8月、悲惨な社会破壊と甚大な数の犠牲者を出して敗戦を迎えました。この間、学校教育は徐々に軍国主義の波に飲み込まれ、「皇国の子ども」として教育されていった事実は知るところです。幼稚園や保育所の保育はどうだったのでしょうか。幼い子どもの生活はどうだったのでしょうか。
　本シンポジウムでは、このような歴史的事実に目を向け、戦争が保育や子どもに及ぼした影響を知ることによって、平和な社会で子どもが育つ意味、乳幼児期からの平和保育の大切さを参加者とともに考え語り合いたいと思います。

話題提供1　清原 みさ子（愛知県立大学名誉教授）

戦時の保育日誌等から「保育の実際」「保育者の思い」「園児の様子」を知る

保育史研究の立場から、近編著『戦争と保育　戦中・戦後の幼稚園・保育所の実際』（新読書社）に収録された全国の幼稚園や保育所の保育日誌をはじめとする諸資料から当時の保育の実際・保育者の思い・園児の様子などを語っていただきます。

話題提供2　宍戸 洋子
（元愛知県半田市立幼稚園園長、元名古屋短期大学教授）

私の疎開体験、先輩の疎開保育実践　そして平和絵本と保育への願い

戦争を体験された保育実践者・研究者の立場から、ご自身の戦争体験－疎開でのこと、集団疎開保育－映画「あの日のオルガン」の先輩保育者たちから学ぶこと　そして平和絵本と保育への願いなどを語っていただきます。

申し込み方法

申し込み方法は右のQRコードからお願いいたします。
申し込み受付開始は、2023年1月20日です。後日詳細をお送りします。
Zoomのアプリ等をご用意ください。